

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗



公益社団法人土木学会 土木広報センター
センター長補佐 **山本 佳正**

1993(平成5)年、鹿島建設株式会社に入社。
以来、シールド工事やトンネル工事を経験し、
2015年から土木学会に出向。



起こり得るリスクを自ら想定することが大事

入社して3年目、下水道シールド工事に携わっていたときのことです。私はシールドマシンを投入するための立坑築造工事で、掘削中の内空管理を担当していました。

シールドマシンを吊り上げ、立坑下に降ろす工程まで進んだとき、支保工の上に立ってクレーンに合図を送っている職長から「シールドマシンが支保工にぶつかって降りない」と言われ、初めて縦寸法が狭いことに気が付いたのでした。

事前に切梁がシールド縦寸法ギリギリにあることは理解し、注意を払っていたのですが、余裕があると思っていた横寸法はコーナーピースにわずかに当たることで、シールドマシンが縦方向へずらされる分があることに気付いていませんでした。そんな状態の中、平面的な確認を行う際は土圧を支持する縦方向の腹起し間（横寸法）と、横方向の腹起しと切梁との間隔（縦寸法）がシールドマシンより大きければ問題ないと考え、1段架設から下げ振りで各段架設を管理していました。

本来ならば、架設段ごとの仮設平面図にシールド外形を書き込み、隅々まで確認すべきだったところを、寸法の厳しい縦方向だけ注意していれば大丈夫という思い込みにより、図面確認を怠ってしまったことが失敗の原因でした。

投入についてはシールドマシン最後部にある

テールブラシ部分をこすりながらも、なんとか降ろすことはできましたが、シールド投入は式典も兼ねていたので、発注者を含めた大勢の人が見ている中での出来事でした。仕事で失敗したこともショックを受けましたが、自分の失敗により発注者の信用を失ったのではないかと感じた恐怖は今でも忘れられません。

この失敗以降、作業計画書に漏れや確認不足がないか等、あらゆるリスクを想定して仕事を進めるようになりました。思い込みによる失敗を防ぐためには、あらゆることを思いめぐらし、自らリスクを想定することが重要なのです。

土被りの小さいNATM工事、住宅街の中でのニューマチックケーソン工事、等を経て、リスクに対する自分なりのアンテナを身に付け、そして開削トンネルによる首都高中央環状品川線と営業線である新宿線との接続工事では優良技術者表彰を受賞することができました。

若い頃の失敗を振り返ると、自分自身で考えをめぐらすことの重要性を強く実感します。そのため、現場の若手職員に対しては「もっと良いやり方はないのか」「伴うリスクは何か」といった問いかけを行い、十分検討するよう指導しています。若手の人たちには、任された仕事を自分事として捉え、自ら考えて答えを導き出しながら、自分方式の現場リスクのアンテナを組み立ててほしいと思っています。

